

## ナホム書1章7節 「苦しい時の助け」

### 1A 慈しみ深い主

1B 逆境の時

2B サタンによる偽り

3B 信仰の堅さ

### 2A 苦難の日の咎

1B 世にある災い

2B 安全な場所

3B 主ご自身

### 3A 身を避ける者たち

1B 自分の信頼する時

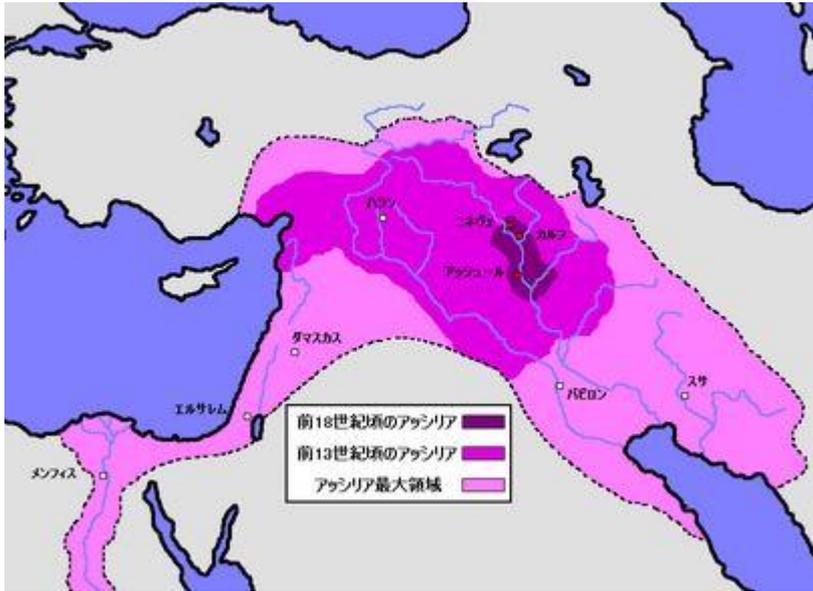
2B 親しく知る主

## 本文

ナホム書 1 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは前回、ミカ書を終えました。今日は午後礼拝でナホム書 1 章から 3 章までを読んでいきます。今朝は、1 章 7 節に注目します。「**主はいつくしみ深く、苦難の日のとりでである。主に身を避ける者たちを主は知っておられる。**」

ナホムの預言は、ニネベに対するものです。ニネベは、アッシリヤ帝国の首都ですが、私たちはヨナの預言において、神がニネベに対しても、彼らが悪から立ちかえろうとしたのをご覧になって、滅ぼすことを思い直されたところを読みました。主は、怒るに遅く、憐れみに富んだ方であることを思います。けれども、それは罰することはしないということを意味しません。神は悪に対して無力な方ではありません。神は、悪に対して必ず悪に報いる方です。公平な方であり、不条理に対して必ず正し、真っ直ぐにしてくださる方です。

ナホムが預言を行っていた時は、ヨナの時よりずっと後のことでした。150 年ぐらい経っています。アッシリヤの王とニネベの人々は、ヨナの預言に対して悔い改めましたが、けれども、時も経って、そこに示された神の憐れみというものは、忘れられています。私たちは、歴史をすぐに忘れてしまいますね、例えば 2011 年の東日本大震災でさえも、どれだけの衝撃だったのか忘れてしまいそうです。そして、語られた神の言葉はさらに忘れてしまうのではないのでしょうか？彼らは忘れてしまい、アッシリヤは領土を拡張し、残虐極まりない方法で諸民族を征服していきました。その間、紀元前 701 年にはセナケリブがエルサレムを包囲したところ、主の使いが 17 万 5 千人の軍隊を滅ぼしました。けれども、彼らの南進は続いています。そして紀元前 663 年に、アッシリヤの王ア



ツシュール・バニパルが当時のエジプトの首都テーベを陥落させました。この時、アッシリヤは最も大きくなります。エジプトの中腹にあるテーベまで攻め取りました。この出来事も、ナホム書3章で、主が言及されています。古代からメソポタミア文明を担っていた国の一つがアッシリヤでしたが、なんと南のもう一つの文明、エジプトにまで勢力を及ぼしていったのです。<sup>1</sup>

ところが612年、ニネベの町は陥落します。つまり50年ぐらいでその広大な

領域を支配していた国が、歴史の中から消えてしまうのです。そこで古代から続いていた国が消えてしまいます。歴史の中ではとても不思議なことでありますが、そこでそのアッシリヤが最大の勢力を誇っていた時、何でもない町出身のナホムが預言を語るのです。これは、主が彼らの行なった悪に対して復讐をされるからなのだ、ということです。興味深いことに数日前、イスラム国が支配していたシリアの町ラッカを、クルド人の民兵組織が制圧したというニュースが入りました。アッシリヤと同じニネベという町、今のモスルを拠点にして三年前、イスラム国はイラクとシリアに勢力を一挙に伸ばしました。そこで行われた首切りや十字架刑、性奴隷、他のおぞましい残虐な行為は、皆さんニュースでお聞きになっていたと思います。けれども、三年後には、ほとんど無くなっているのです。ここにあるのは、主が正しく報いる方だということです。主が、行なった悪に対して悪で報いられるということです。虐げるならば、虐げによって滅びるということです。

### 1A 慈しみ深い主

そして、主がいかにニネベに対して怒りを示されるか、その激しい憤りの預言のさ中に、ここに慰めの言葉があります。もう一度読みます、「主はいつくしみ深く、苦難の日のとりでである。主に身を避ける者たちを主は知っておられる。」世の中の荒波がどんなに激しくなろうと、その中にいても、主はご自分を信じ、拠り頼んでいる者たちのことを忘れていない、覚えているよということです。

### 1B 逆境の時

初めに、「主はいつくしみ深く」とあります。これは、トープ、良いということです。主が天地を造られた時に、「それは良かった」と言われた時の良いです。そして、「詩篇 34:8 主のすばらしさを味

<sup>1</sup> <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%83%8A%E3%83%9B%E3%83%A0%E6%9B%B8%E3%81%AE%E7%9E%91%E6%83%B3%E3%82%92%E5%A7%8B%E3%82%81%E3%82%8B%E3%81%AB%E5%BD%93%E3%81%9F%E3%81%A3%E3%81%A6>

わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。」と書かれている、その主の素晴らしさのことです。主は良い方であり、素晴らしい方であり、慈しみ深い方です。

私たちは、主のすばらしさを状況が優れている時には実感できます。健康である、家族も幸せだ、職場環境も良い、教会生活の充実している、など。こういうことがあれば、主は良い方だ、すばらしいと実感できるかと思います。けれども、病気を患った、家族に問題が起こった、そして職場で大変なストレスを被っているなど、そういうことがあれば、「主はすばらしい方だ」ということは難しいかもしれません。けれども、そこでも「主は慈しみ深い」と言えるかどうか、その中で主の慈しみ深さを信じられるかどうか、信仰に深みをもたらすかどうかの要になります。

詩篇 73 篇には、信仰的に滑り落ちてしまいそうになっている人の、赤裸々な告白が書かれています。彼は、世において何の問題もないように生きている人々、神を恐れかしまなくても上手に生きている人々の姿を見て、自分のしていることが虚しくなりました。神もキリストも信じなくとも、世の中で問題なく生きていけるではないか？という疑問を持ったのです。けれども、彼は神の聖所に入って、彼らの最後を悟ったと言います(17 節)。なぜ彼は立ち返ることができたのでしょうか？ 73 篇 1 節にこう書いてあります、「まことの神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。」慈しみ深さを彼は知っていたので、それが根本的な真理として心に刻まれていたので、それで彼は滑り落ちそうになっても、立ち直ることができたのです。

聖書に出て来る信仰の人たちは、苦しみの中でも主の慈しみ深さを疑いませんでした。ヨセフがそうですね、エジプトに売られて、牢屋に入っても、主が彼と共におられました。ヨブもそうでした、サタンによって、財産と子供たちを失い、皮膚病も患いました。けれども、ヤコブはこのように解説しています。「5:11 見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。」そして、聖書時代の聖徒たちがどのような仕打ちを受けたのか、ヘブル書 11 章では次のように描いています。「11:36-38 また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、…この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。…荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。」それでも、彼らは主の慈しみ深さを疑いませんでした。

## 2B サタンによる偽り

人が罪を犯して、全人類に罪が入り込んだ原因は、何でしょうか？ そう、神が良い方であるという真理を崩しにかかったサタンの仕業があるからです。「創世 3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」主が意地悪な人なのだ、という刷り込みを蛇はエバに行なっていたのです。つま

り、悪魔によって私たち人間は、深い部分で攻撃を受けているのです。神に対して不信になり、罪を犯すその原因は、「主の慈しみ深さ、主の良さを疑わせる」ところにあるのです。

### 3B 信仰の堅さ

そこで私たちは、神の真実と慈しみを信じるという戦いにいます。その葛藤の中で、さらに信仰が固められていきます。いろいろな不都合が起こる度に、私たちはむしろ、信仰が深まり、堅められる機会とも言うて良いでしょう。テサロニケの人たちのことを、パウロは心配していました。新しく信じたばかりなのですが、パウロに危害が及んできたので、逃げたのです。その後、彼らは迫害を受け、苦難の中にいました。パウロは言っています、「1テサロニケ 3:4-5 あなたがたのところに行ったとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができず、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。」苦難の時に、誘惑者、すなわちサタンが来るのではないかと心配だったのです。しかし、彼らが信仰と愛について模範とさえなっていた事を知りました。それで、パウロは言っています。「あなたがたが主にあつて堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。(1テサロニケ 3:8)」

## 2A 苦難の日の咎

そして、「**苦難の日のとりで**」と主は、ご自身のことを言われます。

### 1B 世にある災い

主は、私たち信仰者に苦難がなくなることを約束されていません。アッシリヤの暴虐が酷くなっている時に、その中でナホムが預言しました。そこに書かれているのは、主がアッシリヤに対して、激しい怒りを注がれる中においてのことです。現代のアッシリヤと言ってもよいでしょう、イスラム国がイラクとシリアから無くなりつつありますが、私たちキリスト者がそこにいたとしたらどうでしょうか？そして事実、キリスト者たちがそこにいて難民となっています。その中で、被害を受けないということはありません。他のキリスト者ではない人々と同じように、病気になり、住居を無くし、家族と行き別れになっています。同じように、人の罪や悪によって苦しみがはびこっているこの世に対して、私たちは全く無関係でいることはできないのです。イエス様は父なる神に対して、「彼らをこの世から取り去ってくださるようにならなく、悪い者から守ってくださるようお願いします。(ヨハネ 17:16)」と祈られました。この罪や悪のはびこる世において、それでなおかつ悪魔から守ってくださるよう祈ってくださったのです。

### 2B 安全な場所

私たちは、そこで心の中で絶えず、「安全な場所」を求めています。日本社会では、これほど安全な国はないと言われています。経済的にも、また、物理的な危害からも守られています。健康に

ついても、あらゆる面で配慮がなされています。しかし、その日本でさえ、「居場所」という言葉がありますね。何も危険がないように見えても、「孤独」という危機にぶち当たります。それで、自分の居場所を探しているということになるのです。問題がないように見えても、それが大きな問題の一つになり、それで安全な場所を求めるのです。

欧米の人たちは、軍事的衝突や紛争について敏感です。冷戦時代、西側の NATO とソ連が対峙する危機があった時に、あるイギリス人の夫婦が第三次世界大戦になるのではないかと感じて、世界でどこが最も安全なところかを捜したのだそうです。南半球にある、アルゼンチンの沖にはフォークランド諸島という、英国領になっている島がありました。そこでお店を開いたのです。ところが、1982 年のこと、アルゼンチンがフォークランド諸島に侵攻しました。それで、イギリスは軍隊を送り込み、「フォークランド紛争」が勃発したのです。自分たちが最も安全なところだと思って引っ越したところが、まさしく戦争勃発の場所になったということで、とても皮肉な話です。

### 3B 主ご自身

聖書には、どこが安全なところだと言っているのでしょうか？主ご自身が、苦難の日の岩と言っていますね。箴言にはこう書いてあります。「箴言 18:10 主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走って行って安全である。」主ご自身が岩、やぐらになるということです。サウルから逃げていたダビデも、このように歌いました。「詩篇 61:2-3 私の心が衰え果てる時、私は地の果てから、あなたに呼びわります。どうか、私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。まことに、あなたは私の避け所、敵に対して強いやぐらです。」私たちは、とかく心が衰え果てるまでいかなないと、主に呼ばれることはありません。苦しみの中で、あらゆることを試します。そして、あらゆることを試す術を、世の中は与えてくれます。これをやれば、助かるようになる。そのうちに、どんどん心がすり減っていきます。そして、ついに主の名を呼び求めます。主に叫びます、するとそこに助けがあった、ということです。

### 3A 身を避ける者たち

そして、「**主に身を避ける者たちを主は知っておられる。**」とあります。

#### 1B 自分の信頼する時

日本語訳の、「**主に身を避ける**」という言葉はとても良いですね。英語では単に、「信頼する」としか書いてありません。けれども、身を避けるという言葉には、自分が敵から攻撃されるという前提があります。自分が弱いという前提があります。主にあって自分が弱いことを認めているからこそ、身を避けることができます。自分が弱いと感じる時に、主のところに行きます。箴言には、知恵者中の知恵者として、小さな生き物を取り上げています。「30:24-28 この地上には小さいものが四つある。しかし、それは知恵者中の知恵者だ。蟻は力のない種族だが、夏のうちに食糧を確保する。岩だぬきは強くない種族だが、その巣を岩間に設ける。いなごには王はないが、みな隊を組んで

出て行く。やもりは手でつかまえることができるが、王の宮殿にいる。」全ての生き物が、自分の身を隠さないといけない、強いものに避けないといけないと分かっているのです。そして、その弱さの中にキリストの恵みが溢れます。パウロは祈ったところ、主から答えがありました。「2コリント 12:9 わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」

## 2B 親しく知る主

そして、すばらしいのは「**主は知っておられる**」ということです。主はもちろん、全てをご存知ですから、主に身を避けていない者たちのことも知っておられます。けれども、ここでの「知っている」というのは、意味が違います。親密に知っているということです。私たちは、主に信頼する時、主に身を避ける時に、必ずしも見た目には良いものではありません。状況からして、そこに主がおられるのか？おられないのではないかと感じてしまうことも、多々あります。しかし、主は、ご自分に拠りすぎる者については、よく知っておられます。

自分が感じている恐れがあるとすると、主はその恐れをよく知っておられます。だから、しばしば神の人たちに、「恐れるな」と語りかけてくださいます。そして、主は、たとえ辛くて寂しくなっても、主のゆえにこらえているなら、そのさみしさを必ずご自分の臨在で満たしてくださいます。主が共におられることを、その孤独感の中で味わうことでしょう。そして、自分がゆえもなく告発されたり、悪口を言われたりしたら、主が必ず付いておられて、自分のために戦ってくださいます。主が盾となってくださいます。そして人生の試練になったら、その試練を良く知っておられます、主は耐えることのできる力を与え、また逃れの道を備えてくださいます。主は、知ってくださっています。ご自分の身を避ける者が、弱くされているように見えても、親しく知っておられます。